

子どもへの意思決定支援について考える ——保育園での「お弁当づくり」から——

蓮見元子*・川嶋健太郎**・北原靖子***

Decision-Making Support for Children From the “Lunch Box Work” in the Nursery

Motoko HASUMI, Kentaro KAWASHIMA, Yasuko KITAHARA

要 旨

子どもの意思決定に関する外的要因および内的要因の影響についての検討を行った。対象児は川村学園女子大学附属川村保育園の4・5歳クラスの子ども29名。活動内容は粘土でのお弁当づくりであった。子どもがお弁当の中身を選択するとき、先生が作ったお弁当の見本が提示されると、その影響を受けるのか、それとも他の要因によるのか。子どもに意思決定の理由をたずね、意志決定に及ぼす外的要因の影響について調べた。その結果、子どもは大人（例えば先生）のお手本や提示にある程度従うものの、おもに自分の好みや考えで選択することがわかった。

さらに、子どもの作業を段取りする力である実行機能（記憶・抑制・柔軟）の個人差について注目し、その差はお弁当づくりの意思決定や子どもの作業に何らかの影響を与えるであろうと仮定した。意思決定の容易さは実行機能の「柔軟」と関連があった。4歳児と5歳児で比較したところ、「参照」で差異が見られ、5歳児の方が周りからの情報を得ようとしているようすがうかがわれた。

今後もさらに子どもの意思決定を規定する要因について明らかにし、好きだから選択するというだけでなく、さまざまな情報を駆使したうえで、望ましい意思決定ができるような支援が必要であろうと考察された。

キーワード：意思決定 4, 5歳児 実行機能

*教授 発達心理学

**東海学院大学

***教授 発達心理学

問 題

意思決定とは、「ある目的を達成するために、複数の選択可能な代替的手段の中から最適なものを選ぶこと」であるが、通常大人が何かを選択するときは、さまざまな条件を考慮し、情報検索を行うなど、いろいろと吟味してから意思決定を行う。他方、子どもが意思決定をする際に選択する基準は何であろう。おそらく発達過程に応じて選択すべきさまざまな対象や事象に対して子どもなりの「意思決定」を行っていくであろうが、年少の子どもの場合は、たとえば、その日に着る洋服や食べるものなど、保護者や保育者が提示した限られた選択肢の中から選択する機会が多いであろう。それ故に子どもの意思決定は、保護者・保育者との相互作用・学習プロセスであると考えられる。なぜなら、保護者は子どもに複数または1つの選択肢を提示する。子どもは保護者の提示した限られた選択肢の中から選択する。子どもは難しい選択の場合は時間がかかり、ダメな選択肢は拒否する。保護者は子どもの好みや選択傾向を学習し、次の選択機会では子どもに拒否されにくい選択肢の種類・提示方法を変更するといった相互に影響し合い、よりよい選択ができるようになっていくからである。しかし、子どもが自分で考え吟味して何かを選ぶことができるなら、それは主体性が育っていることを表し、とてもよいことであろう。しかし、自己決定の機会を与えていると思っても、実際には大人がその決定を誘導しているかもしれない。

意思決定はメタ認知活動であるということもできる。自分の意思を確認するだけでなく、周りの意見を聞き、選択すべき事柄に関する情報を集め、最終的にもっともよい結論を導きださなくてはならないからである。すでに社会心理学や学習心理学の分野で、意思決定に関する多くの先行研究がある。たとえば、旅行行動や購買行動について研究されてきた。観光動機には push 要因（旅行に行こう）と pull 要因（どこに行こう）があるといわれている（佐々木, 2008）が、どのような動機で、意思決定し、訪問先を決定したかによって、その後の観光行動が異なるという。そこに行こうと決めたまっかけは今日 net 検索も多いが、TV 視聴や知人から聞いた話なども直接的な意思決定に影響を与えている。観光動機尺度得点を従属変数として、情報を検索してから意思決定したものと、意思決定をしてから情報検索をしたものとの比較したところ、意思決定過程の程度が低いものは観光動機尺度において、緊張緩和（リラックス）が高く、文化見聞が低いことがわかったという。さらに「価格が高いが品質がよいものと価格が低い品質の悪いものだったら、どちらを購買すべきか」という二つの選択肢があるところに、第3の選択肢（魅力効果、類似効果、妥協効果）があった場合、消費者の選択行動はどう変化するか、表示のしかた（属性フレーミングと目標フレーミング）によって選択に

違いがあるのか、購買するものの種類の影響を受けるのか、といった研究もある。Levin and Gaeth (1988) は、「赤身 75%と脂身 25%」のどちらか一方を表記した場合、多くの人は赤身 75%の表記の方が味がよく、脂っこくないと評価するとした。また、どのような医療行為を受けるかを決定するときの患者の心理に関して、提示するものが失敗比率か成功比率かによって、説得力に違いがあるという研究もある。さらに、「乳房自己診断を行えば、対処しやすい初期段階で腫瘍を見つけることができる」といったポジティブフレームによる提示の仕方が意思決定にプラスの影響を与えるという。

最近の子どもは、大人しくて、余り自分の考えを主張しないとされている。自由に選ぶ課題を与えられた時、子どもは、何に基づいて意思決定を行うのであろうか。提示する相手の影響（外的要因）をうけるのだろうか。それとも、自分が好きだからなど、自己の好みや体験、さらには実行機能といった能力（内的要因）の影響を受けるのであろうか。子どもはさまざまな場面で意思決定を求められるはずだが、発達的に見ると2歳のころまでは、意思を表現することはあまりないようである。3歳ごろから、自己主張が始まり、4、5歳ごろには親との遊びなどにおいて主導権を握るようになり、生活の中のさまざまな場面で、意思決定をするようになるなど、自分の意思で選択するという意思決定へ意欲が次第に育ってくると考えられる。しかしながら、年少の子どもの意思決定に関する実験的な研究はほとんどないのが現状である。今回、川村保育園で、意思決定に関する実験的観察研究をする機会が与えられたので、報告する。

目 的

「主食やおかずを選んでお弁当を完成させる」という工作を用意し、外からの要因・内からの要因が、意思決定や作業にどのような影響を及ぼすかについて調べ、子どもの健やかな意思決定を尊重し、育むあり方について検討する。

そこで具体的には、本研究では以下のことを明らかにすることを目的とした。

1) 意思決定の外的要因の影響について：お弁当づくり工作において、子どもの主食やおかず選択には、いつも一緒にいるクラスの先生の影響が生じるだろう。先生と見知らぬ他人（学生）が見本提示した場合に差異が見られるであろう。また、複数の選択すべきものの中から指定された数のものを選択する際に子どもはクラスの先生が示したものを参照して選択するであろう。

その際に、子どもは選択の理由を、「先生が作ったので自分も作った」「先生のお弁当と同じにしたかった」というように表現するであろう。

2) 意思決定の内的要因の影響について：子どもの作業を段取りする力である実行機能（記憶・抑制・柔軟）には個人差があり、その差はお弁当づくりの意思決定や子どもが作業をする際に何らかの影響を与えるであろう。保育園での日常生活における実行機能とお弁当工作課題での実行機能には違いがあるか、年齢差はあるか、他の行動（言語・参照）との関連はどうかなど、実行機能について検討し、そのうえで、実行機能が意思決定に及ぼす影響について明らかにする。すなわち、実行機能のつよいものは困難な状況に遭遇した時にでも選択がスムーズに行われ、よい意思決定ができるであろうという仮説を立て、検証を行う。

方 法

対象児： 川村学園女子大学附属川村保育園の4・5歳クラスの子ども合計29名

ばら組（4歳児）14名 ひまわり組（5歳児）15名

観測者： 川村学園女子大学 心理学科学生9名、教員2名（司会担当）

協力者： ばら組・ひまわり組 担任先生2名

日時・実施場所（2015. 6. 17）川村保育園

活動内容：お弁当工作

材料：

お弁当の容器・持ち帰り用別箱（一人1つずつ）

主食2種類（ごはん・パン用の粘土）

おかず10種類（粘土やフェルトで作ったハンバーグ・レタスなど）

おかず6種詰め合わせ見本写真（先生が見せる用・各組1枚）

エビフライ（ままごと用既製品、一人1個）

シューマイ材料（自分で作る工作用・一人1～数个分）

子どもの評定用顔刺激（笑顔が1～5個並んだもの）

人員配置と情報整理：

各テーブル観測者1人と子ども2～3人が向き合って座り、観測者は子どもとやりとりをしながら子どもが作業する様子を観察し、後に各子ども別に記録用紙に整理した。

手続き： シナリオ

(0) 挨拶 (司会)

(司会)「こんにちは。今日は大学から、みなさんがお弁当づくりをして遊べるよう、準備してきました。私がつくりかたをおはなししますから、よく聞いて楽しく作りましょう。みなさんの机には、お姉さんが座っています。いろいろおはなしを聴いたり、お手伝いをしてくれます。こんにちはと、ごあいさつして、なかよくしてくださいね。」

(1) 主食づくり

(司会)「さあ、はじめに、ごはんか、パンの、どちらか1つを作ります。ねんどでつくりますよ。先生とお姉さんにやってもらいましょう。おふたり、前に来ててください。みんな、よく見ていてください。」

「おふたりは、パンとごはんの、どちらがいいですか？」

(お姉さん)「私は、ごはんにします。」

(先生)「私は、パンにします。」

(司会)「ではおふたりとも、ねんどで作ってみてください。」

(先生・お姉さん)「できました！(掲げる)」

(司会)いま見てもらったように、先生の作ったパンは茶色のねんど、お姉さんのつくったごはんは白のねんどでつくります。ごはんかパン、どちらにするか決めて、みんなの前にいるお姉さんにいってください。お姉さんが粘土を渡します。お姉さんは、ごはんにのせる梅干や、パンに入れるハムもくれますよ。では、おいしく作りましょう。できたら、お弁当箱にいれましょう。

(観察者)パンにするか、ご飯にするか、教えてね。

(観察者)それでは、作ってください。(→子どもは制作する)

(観察者)「どうしてそっち(ごはんまたはパン)に決めたの？」(←こども一人ひとりに尋ねる)

(2) おかず詰め

(司会)では、こんどは、おかずのはなしを聞いてください。おかずは前にいろいろあります。お弁当につめていきます。前もって先生が選んでつめた写真があります。どんなのを選んで入れたのか、見せてもらいましょう(写真を掲げる)

(先生)はい、先生は、(写真を示しながら)おかずを6つ選んで入れました。これはハンバーグでしょ(現物をトレイから取って、はっきり写真と対応させながら見せ、お弁当箱にいれる)、それからウインナー、トマト、オムレツ、スパゲッティ、きゅうり(以下、順不同でよいので、写真のおかず全てを写真と対応させながら見せてゆく)。いいでしょ？ こんなふうに、おいしいお弁当をみんなも作ってみてください。

(司会)「お姉さんに取りに行っていくよ」と言われたお友だちは、おかずを前に取りにいきます。お弁当箱は机に置いておいてね。両手に一つずつ、2つだけやさしくとってください。取ったら席に戻ってきて、お弁当箱につめます。みんなが取れるように、同じおかずは1つだけで、一人でいくつもとらないでください。

最初は何をとって、それから次に何をとりうかな、考えておいてね。(見本の写真を、正面の机の脇におく)

では、おかずを取りに来てください。

(観察者) (順次、グループで一人ずつを指名し、取りに行ってもらう)

○さん、取りに行ってください。お帰りなさい。最初はどれをとったの？ (←子どもがとってきたら) どうしてそれをとったの？ (順番と中身を記録する)

(二巡目以降では) (発話や、詰め合わせ行動も観察する。見本写真を途中で見たか、隣の子の様子も見たかなど、併せて観察する。)

(3巡して6つおかずを取ってきて、詰めおわったら、ケータイ等で弁当写真を取り、全て撮り終わったら司会に連絡する。)

(3) 新規追加①エビフライ

(司会) あ、そうそう、別にまだおかずがありました！

(先生) (エビフライを出しながら) みんな、見てください。素敵なおエビフライがいま到着しました。これは、ずっとおままごとに使えますね (二つに切れる様子などアピールする)。お弁当に欲しかったら、1つもらっていいことにしましょう。お姉さん、グループごとにみんなの数だけ取りに来て、机においてあげてください

(お姉さん) はい

(4) 新規追加②シューマイ

(司会) それから、お姉さんたちは、シューマイとか、自分でつくれるおかずの箱ももってきています (各テーブルごとに、おかず材料箱 (3) を指でしめて、みせる)。

シューマイの作り方を教えてもらってつくって、入れてもいいですね。あと、前におかずも残っていますから、欲しいのがあったら、こんどは好きなだけ取りにいったいいですよ。すてきにおいしく、お弁当のしあげをしましょうね。

その前に、先生から一つ、とてもとても大事なことを伝えてもらいます。先生、よろしく願います。

(先生) お弁当は、フタがしっかりできないと、こぼれてしまいますね。もって帰れなくて、それでは困ります (実際にやってみせる)。お弁当は、かならずフタが閉まるようにしてください。

もし閉まらないときは、しまるように直しましょう。たとえば、(1つ出して、いれかえたらフタが閉まる様子を見せる) ほら、直したら、ちゃんとフタができました。

(司会)

おかずが余ったときはお姉さんにいえば、ちゃんともって帰れます。

お弁当がすっかりできたら、お姉さんについて、フタがちゃんとしまるか見てもらいましょう。

それではお姉さん、エビフライを取りに来てください。

他の材料と一緒にみんなに見せてあげて、しあげをお手伝いしてください。

(観察者) (エビフライを取って戻ってくる) はい、エビフライをとってきました。それから (材料

子どもへの意思決定支援について考える

箱を開けて)、この中のものでシューマイを作ってみるから、やりたかったら言ってね！(手早く1つ見本をつくってみせる)。

できたら私に教えてください。最後におはなしをききます。

(これまで作ってきたお弁当に、新しいおかずをどのように組み入れて完成させられるか、後で様子を伝えられるよう、よく観察する)

(4) 感想聴取 (観察者)

写真撮影・感想聴取

(終わった子どもには、フタがしまるか見てあげる。しまったら、ケータイで写真を撮ったあと、ポラロイドでも写真を取り、画像が出るまでの待ち時間に話を聞く)。

顔カード

① できばえ評定

今日のお弁当はどれくらい上手く出来たと思う？ (顔カード左はじから順次指さしながら)

「できた」「上手にできた」「とても上手にできた」「とてもとても上手にできた」「とてもとても、すごく上手にできた」の、どれかな、一つ選んでください(回答を確認して記録する)。

② 楽しさ評定

それじゃ、今日のお弁当は、どれくらい楽しかったかな？ (顔カード左はじから順次指さしながら)「楽しかった」から「とてもとても、すごく楽しかった」の、どれかな、一つ選んでください(回答を確認して記録する)。

(5) 片付け (司会・お姉さん・先生)

(先生) (もし時間があれば) みんなのお弁当、上手に出来ましたね？ (見せ合ったりを促す)

(司会) では、これでおしまいにして、片付けにします。お姉さんに袋を出してもらって、できたお弁当をしましましょう。あまったおかずは、入れ物をお姉さんからもらって、そこに入れて、お弁当と一緒に袋にしまって、もってかえっていいですよ (お姉さんたちが手伝う)。

当日の流れと観察記録の作成

1. 司会がお弁当づくりをすると伝え、先生と学生(以下お姉さん)が、それぞれパンとごはん(おにぎり)を作ってみせ、子どもにどちらか選ぶよう伝える。
2. 先生が見本写真を示し6種のおかずを1つ1つ見せ、自分でおかずを詰めるよう伝える。子どもは司会の指示にしたがい、一度に一人2個、計3回(6個)おかずを正面テーブルから取りに行き、弁当箱につめる。
3. 作品を写真撮影する。
4. 先生「忘れていたが、エビフライがあった」「フタがしまるようにつめる」「別箱も使える」「シューマイも作れる」など、追加の情報を与え、子どもたちはお弁当を仕上げる。

おかず追加状況の意思決定との関係について観察する。

5. 作品完成後、「作品のでき」「作業の楽しさ」について、各子どもに顔刺激の笑顔1～5個から1つを選んで評定してもらう。
6. (実行機能と関わる行動) 作業ぶりを観察し、得点が高いほど、項目に関して「つよい」ことを意味するよう、各子どもの各結果を整理する。
 - ①抑制 (2項目) (例)「作業途中でも呼びかけられたらすぐやめて、指示に注目した」
 - ②記憶 (2項目) (例)「おかずを出し入れしたら、何か出したまま忘れた」
(⇒逆転項目として、数値を逆方向に変換)
 - ③柔軟 (2項目) (例)「おかずが増えた時、上手な入れ替えをした」
7. (その他の行動) 作業ぶりを観察し、(各項目「0：全く当てはまらない」「1：少し当てはまる」「2：たいてい当てはまる」で評定)
 - ④言語 (3項目) (例)「自分からお姉さんに質問したり頼んだりした」
 - ⑤参照 (4項目) (例)「途中で友達の弁当をよくのぞいた」
8. 完成作品を写真撮影する。

評定	評価基準
1	主食が大きすぎる
2	おかずが重なり、下のおかずが見えず、フタが閉まりそうもない
3	おかずが重なってはいるが、中身は見える
4	葉物(レタスやキャベツ)が下に敷いてある
5	おかずが重ならず、6個きれいに入っている

9. 日常生活場面(担任先生から提供)における実行機能評価の観点
(以下を元に、強い方が普通か判定)

領域	カテゴリー	項目例
抑制	葛藤抑制	他の子どもに比べ、気が散りやすい
	遅延抑制	人の話に口をはさみ、最後まで話を聞こうとしない
シフト	新規事象への対応	行事や当番など、新しい活動や状況に慣れるのに時間がかかる
	切り替え	行動や作業を中断して、別の行動にうつれない
メモリー	ワーキングメモリー	やり方や注意点などの指示をいくつか与えると、何をするのかわからなくなる

10. 子どもたちには記念写真がプレゼントされ、お弁当と一緒に持ち帰ってもらう。

結 果

1) 意思決定の外的要因について

①主食（ごはん：お姉さん，パン：先生）選択

先生はパンを作り，見知らぬお姉さんはごはん（おにぎり）をつくった。それぞれ提示するモノのどちらを選択したのか，その結果を表1に示す。

表1 主食の選択

	4歳児	5歳児	合計
パン	8	11	19
ごはん	6	4	10

パン対ごはんの選択はほぼ2対1でパンの方が多かったが，比率の差は統計的には有意ではなかった。【 χ^2 検定 $\chi^2(1)=2.79$ n.s.】

②主食（ごはん：お姉さん，パン：先生）選択の理由

選択理由として「好きだから」「おいしいから」と自分の好みをあげたもの，「簡単だから」と自分が粘土でつくるときに簡単だからいいという理由をあげたものがあったが，情報を与えた相手「先生を選んだから」「先生が作っていたから」という回答はなかった（表2）。

すなわち，パン（ごはん）かパンかの意思決定は，「好きだから」，「美味しいから」といった自分の好みによるものであって，意思決定の外的要因である，「先生のまねをした」，「先生が作ったから」といった理由はみられなかった。

表2 主食選択の理由

	4歳児クラス		5歳児クラス	
	パン	ごはん	パン	ごはん
好きだから	5	5	6	2
簡単だから	2	1		
朝食べたから	1			
美味しいから			3	1
いろいろなものが入るから			2	
答えず				1
計	8	6	11	4

③おかず選択

先生は10種のおかずの中からあらかじめ指定されていた6個を選んで、お弁当のおかずとした。子どもたちは10種類のおかずの中から、6個のおかずを選択するように教示され、先生と同じようなお弁当を作ってみて下さいと働きかけられた。

子ども1名あたり平均4.5個（8割）が先生と同じものだった。先生と同じおかずの選択は、偶然同じになる場合の期待値である3.7個（6割）より、有意に高かった。【期待値の算出の仕方 たとえば、赤6個白4個とし、うち戻さないで、全部で6個取り出すときに赤が含まれている数の組み合わせは210通り、それを6回繰り返した総数は786なので、除すると3.74の期待値が出る】よって、子どもがおかずの選択という意思決定した際に、先生の教示の影響を受けたと考えられた。

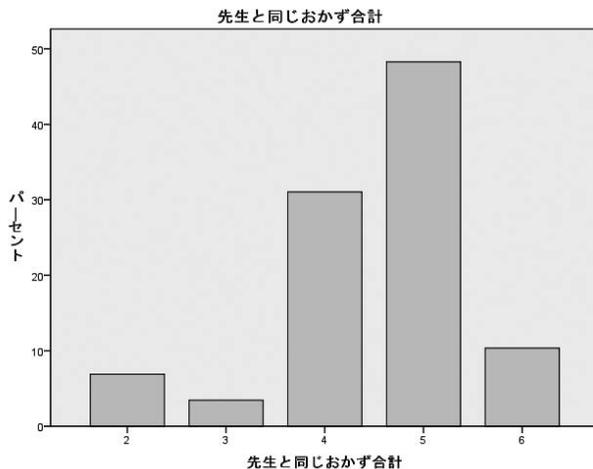


図1 先生と同じおかずを選択した数別の子どもの比率

他方、別の分析も行った。10種類のおかずごとに選んだ子どもの数を算出した。ウインナー、パスタ、ハンバーグ、オムレツ、ポテトの順が多かった。トマト、きゅうりはある程度選ばれたものの、レタス、キャベツの葉物は選ばれる比率が低かった（表3）。

子どもへの意思決定支援について考える

表3 10種類のおかずを選んだ子どもの比率

おかず	選んだ子どもの人数	比率
★ハンバーグ	23	.79
★ウインナー	28	.97
★トマト	17	.59
★きゅうり	17	.59
★パスタ	24	.83
★オムレツ	21	.72
ポテト	19	.66
ゆでたまご	17	.59
レタス	3	.10
キャベツ	1	.03

(注) ★は先生が選んだおかず

先生が選んだおかず（6種類）と選ばなかったおかず（4種類）で、子どもの数の比率に差があるか Mann-Whitney の順位検定を行ったところ、先生が選んだおかずの平均ランク 4.00、選ばなかったおかずの平均ランク 7.75、 $p=0.52$ でわずかに有意差は認められなかった。

④おかず選択の理由

おかずを選ぶたびになぜそのおかずを選んだのかの理由を説明してもらったところ、以下のようであった（表4）。

「好きだから」、「美味しい」から、という回答が多かった。それ以外には、「はいるから」「すいてたから」などがあった。

表4 おかず選択の理由

先生と同じおかず		先生と違うおかず			
ハンバーグ	好きだから	7	レタス 美味しそうだから	1	
	美味しい	3			
	すいてたから	1			
ウインナー	好きだから	5	キャベツ	(何も言わない)	1
	美味しいから	6			
	かわいい	1	ポテト	好きだから	7
	これがいいから	1		マックで食べるから	1
	すいてた	1		ゆで卵	好きだから
パスタ	好きだから	5	入るから		1
	美味しいから	2	お母さんがよくいれる		1
	入るから	2	美味しいから	1	
トマト	(理由迷い)	1			
	好き	3			
	美味しい	1			
	入るから	1			
オムレツ	好きだから	3			
	かわいいから	1			
	おばあちゃんちで食べた	1			
きゅうり	好き	2			
	大好きだから	1			

2) 意思決定の内的要因について

子どもの作業を段取りする力である実行機能（記憶・抑制・柔軟）はお弁当づくりの意思決定やお弁当づくりの作業をする上で何らかの影響を与えるであろうか。また、日常生活における実行機能と工作課題での実行機能には違いがあるのか。実行機能には年齢差はあるか、他の行動（言語・参照）との関連はあるかなど、実行機能について検討し、そのうえで、実行機能という内的要因が意思決定に及ぼす影響について明らかにした。

①観察された実行機能（記憶・抑制・柔軟）

子どもがお弁当を詰めるようすを観察して、各自の行動を、抑制（2項目）記憶（2項目）柔軟（2項目）の実行機能の観点から評価した。「抑制」は落ち着いた行動ができる強さを表す。「記憶」は言われたことやしたことを覚えている強さを表す。「柔軟」は新しい事態に対する適応の強さを表す。図2に示すように、実行機能評価得点にはばらつきがあった。

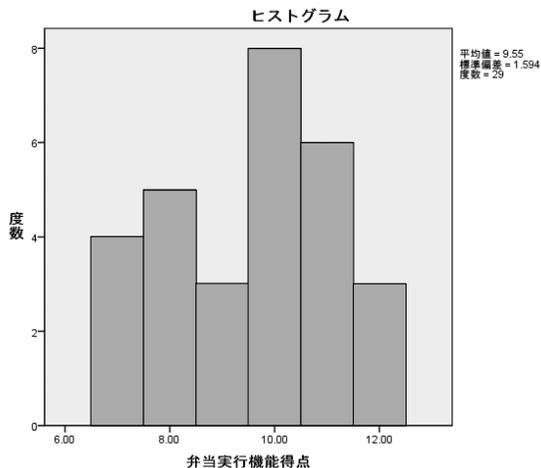


図2 観察された実行機能の得点分布

しかし、クラス（年齢）の違いによる差異は認められず、どちらも少し強い方が多かった（図3）。

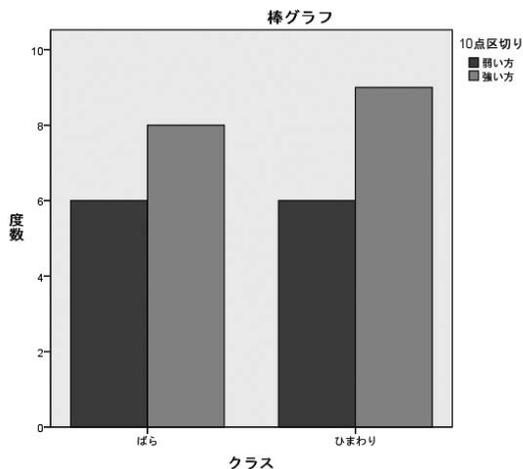


図3 弁当工作実行機能強弱別クラス別クロス表

さらに、性別の比較も行ったが、有意な差異はなかった。

②日常生活での実行機能

保育園の日常生活において、各子どもの実行機能が、強いかなかを、評価した。日常での実行機能の評価と今回の工作における実行機能の評価得点とは関連性があるか、検討した。 χ^2 検定の残差分析を行ったところ、関連は認められなかった。(研究倫理にしたがい、観察記録も園からの情報もすべて番号に直して記録し、個人が特定されないよう注意した。)

表5 10点区切りと園情報分類のクロス表

今回の工作での実行機能得点		日常活動		合計	
		普通	良好		
10点区切り	普通	度数	7	5	12
		調整済み残差	-0.3	0.3	
	良好	度数	11	6	17
		調整済み残差	0.3	-0.3	
計			18	11	29

今回のような、楽しく簡単な作業では、ふだんもたつく子どもも参加できたようである。子どもの発揮される力は一枚岩ではなく、場面によっても異なってくると言えよう。

③実行機能とおかず追加状況での意思決定との関連性について

エビフライが追加された時の子どもの行動は以下のようなようだった。

表6 エビフライが追加された時に出現した行動(人数)

エビフライが追加された時の行動	4歳児	5歳児
どうしようかなと尋ねる	1	0
中身を出して詰め替える	5	2
弁当箱の中に押し込む・入れる	3	1
いらぬという・とらない	2	3
別箱を利用して詰める・詰め替える	1	8
エビフライを半分にして入れる	2	1
計	14	15

子どもへの意思決定支援について考える

4歳児では、中身を出して詰め替える子どもが多かったが、5歳児では、用意された別箱を利用する子どもが多かった。こういった行動の選択がスムーズに行われたのか、意思決定の容易さについて、子どもの行動を観察評価し、3水準に分けた。さらに、実行機能の強さと意思決定の容易さの関連を見た。

表7 実行機能得点と意思決定の容易さのクロス表

		意思決定の容易さ			合計	
		困難	少し難あり	容易		
実行機能 得点	弱い方	人数	4	4	4	12
		調整済み残差	1.9	1.4	-2.7**	
	強い方	人数	1	2	14	17
		調整済み残差	-1.9	-1.4	2.7**	
計			5	6	18	29

**p<.01

表7を見ると、おかずが追加されたときに、自分はどうかの意思決定が、実行機能（柔軟項目3番）の得点が高い強い方の群で容易が多く、クロス集計後、残差分析をしたところ p<.01 で、有意な差異が示された。(図4)

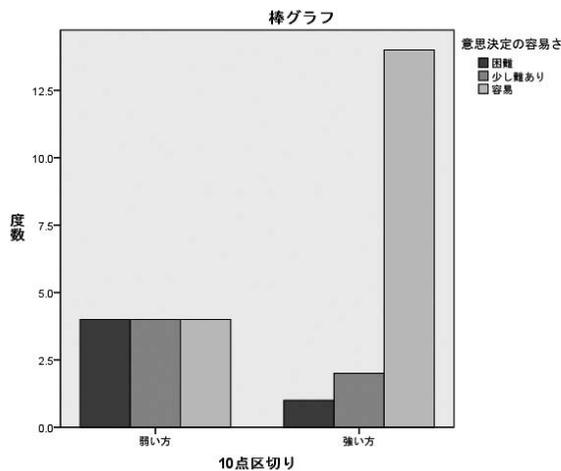


図4 実行機能の強弱と意志決定の容易さ

④実行機能と意思決定行動との関連性について

お弁当づくりでの各子どもの行動を3つの実行機能の観点（記憶・抑制・柔軟）と言語、参照）の観点から観察評価した。「参照」は子どもが外的要因を取り入れる強さを表し、「言語」は自分の気持ちや考えを外に発信する強さを表す。

これら5つの観点間の関連性と意思決定行動との関連性について見た。意思決定行動として、先生と同じおかずの数（外的要因の強さを表す）とエビフライが投入された時の行動の評価（意思決定の容易さ）をあげた。

関連性のあった項目は多くはなかったが、「抑制」と「言語」（負の相関、 $p<.05$ ）、「言語」と「先生と同じ数」（ $p<.05$ ）、「柔軟」と「参照」（ $p<.05$ ）、「柔軟」と「意思決定の容易さ」（ $p<.01$ ）に有意な相関がみられた。

表8 実行機能得点と意思決定行動との関連性（相関係数）

		抑制	記憶	柔軟	言語	参照	同じおかず数	意思決定の容易さ
1. 抑制	相関係数	—	-0.02	0.23	-0.53	0.05	-0.16	0.33
	有意確率				.003**			
2. 記憶	相関係数		—	0.29	-0.31	-0.01	-0.13	0.03
	有意確率							
3. 柔軟	相関係数			—	-0.18	0.38	-0.02	0.73
	有意確率					0.04*		0.00**
4. 言語	相関係数				—	0.08	0.39	-0.20
	有意確率						0.04*	
5. 参照	相関係数					—	0.10	0.31
	有意確率							
6. 同じおかずの数	相関係数						—	0.01
	有意確率							
7. 意思決定の容易さ	相関係数							—
	有意確率							

** $p<.01$, * $p<.05$

「意思決定の容易さ」は「柔軟」すなわち、新しい事態に対する適応の強さと有意な相関がみられ、何か決めなければならないという意志決定事態における行動のスムーズさは実行機能の強さと関連することがわかった（表8）。

また、言語活用については、実行機能の弱い方がむしろ高くなった（図5）。困ったりして、いろいろお姉さんに尋ねたのだろう。

子どもへの意思決定支援について考える

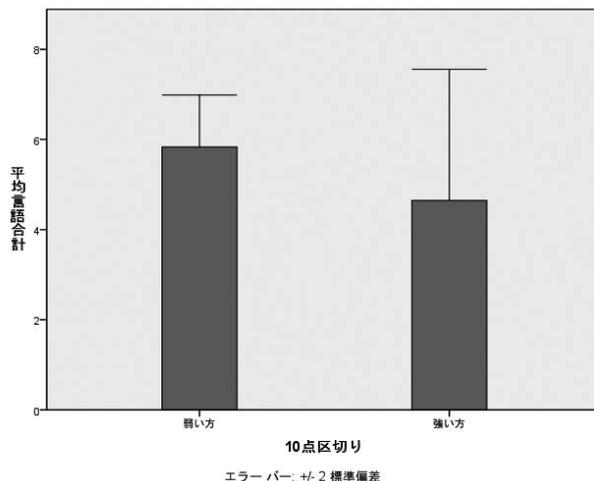


図5 実行機能得点強弱と言語得点の差異

なお、4歳児と5歳児で比較したところ、実行機能得点で有意な差異がみられたのは「参照」のみであった。 $(t(27)=2.11 \quad P<.05)$ 5歳児の方がまわりを見て、他者からの情報をとりいれようとする傾向が強かった。

⑤時期別クラス別作品写真評定

撮影された写真を見て、おかずを詰めた前半と完成した後半とで子どもの作品を合議して評価した(図6)。

5歳児では始めできばえの評価が悪かったが、最後に整えることができた。おそらく主食を作り始めた時は、中にいれるおかずの数が知らされていなかったなので、張り切って、大きすぎる主食を作ってしまう、なかなかお弁当箱に収まり切れなかったのだが、途中でエビフライと別箱が投入されると、別箱をうまくつかって、収まりのよいお弁当ができたといえよう。

考 察

1) 意思決定の外的要因について

意思決定の外的要因として他者からの影響についての検証を行った。子どもが主食やおかず選択するにあたって、いつも一緒にいるクラスの先生と見知らぬ他人(学生)が提示した場合の差異はほとんど見られなかった。子どもたちは、自分の作るお弁当は自分の好きなものを入

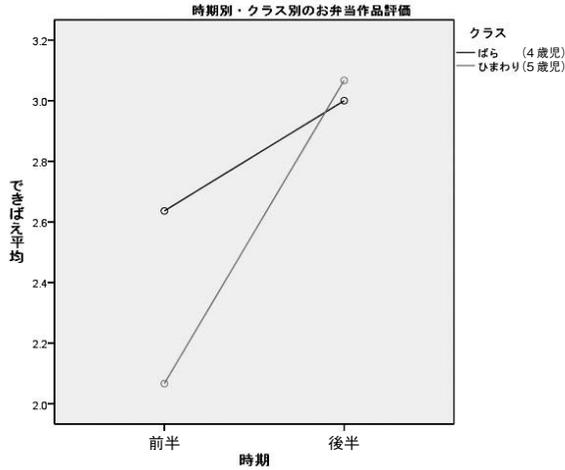


図6 時期別クラス別のお弁当作品評価

れるという意思決定が働いたのか、意思決定の理由を「先生が作ったので自分も作った」ではなく、「好きだから」「美味しいから」と説明した。さらに、複数の選択肢があつて、複数のものを選べるときでも、子どもは大人（例えば先生）のお手本や提示に従うより、自分の好みや考えで選択した。先生が提示したお弁当のおかずの影響はあまり受けなかったといえよう。

4歳児と5歳児で比較したところ、「参照」で差異が見られ、年長組の子どもたちの方が子ども、大人にかかわらず、周りからの情報を得ようとしているようすがうかがわれた。今回、意思決定における外因的要因を他者からの見本提示としたが、年少の子どもほど他者からの影響は受けにくく、自己の感覚、好き、美味しいという感覚に従って意志決定したと考えられる。

よりよい選択を促すための年少の子どもへの意思決定の支援を考えた場合、子どもは好きだからという理由で選択してしまいがちなので、大人から見て好ましいと思われるものを好きになるように支援すればよいことになる。また、感覚的に選択する傾向があるので、もっといい選択がないか、子どもなりに主体的、多面的に検討するという姿勢を育てることも大切であろう。

2) 意思決定の内的要因について

今回、子どもの作業を段取りする力である実行機能（記憶・抑制・柔軟）には個人差があり、その差はお弁当づくりにおける意思決定や子どもが作業をする上で何らかの影響を与えるであろうと仮定して、実験的観察を行った。日常生活における実行機能と工作課題での実行機能と

子どもへの意思決定支援について考える

に関連性がみられなかったが、それは、お弁当づくり課題が皆にとって容易だったからかもしれない。また、実行機能には個人差があったが、年齢差は「参照」にしか見られなかった。年齢が上がると、周りのようすを伺い、周囲の情報から自分の意思を決定する動きが出てくると思われる。意思決定の容易さは「柔軟」と関連があった。「言語」で情報を集める働きは、抑制と負の相関があったので、外から見ると落ち着きがなかったり、指示に大人しく従わないように見受けられる子どもは、むしろいろいろと意思決定のための情報を求めているのかもしれない。「選ぶように促す」場を用意したからといって、意思決定が主体的で望ましいものとして実現できるとはかぎらない。子どもは意志決定にあたって、先生の見本や、友達のようすなど、今回その影響は大きくはないとされたが、「周囲からの影響」を受けている。それを踏まえて、うまく意思決定支援を行い、子どもの望ましい意思決定が育つように、制御する必要がある。また、子ども自身でも段取りが強い子・弱い子がいるので、意思決定をしてもうまく実行できるとはかぎらない。成功体験を味わって成長できるようなチャンスを与えていく配慮も求められるであろう。

参考文献

- 大村一史（2015）発達障害児に対する実行機能の認知トレーニング 山形大学紀要（教育科学）第16巻第2号 25-40
- 山村麻子 辻本 耐 中谷素之（2011）幼児期にける実行機能と他者感情理解の関連性 大阪大学教育学年報, 16, 59-71
- 佐々木宏之（2010）意思決定フォーミング効果の三種類—幼児の発達と保育の観点から— 暁星論叢, 60巻, 55-72
- Levin, I. P., & Gaeth, G. J. (1988). Framing of attribute information before and after consuming the product. *Journal of Consumer Research*, 15, 374-378.

謝 辞

川村学園女子大学付属保育園の先生方、ならびに子どもたちに大変お世話になりました。ここに謹んでお礼を申し上げます。

また、この研究は学術研究助成基金助成金（2635094「子どもの意志決定能力を育成するための支援ツールの開発」代表 川嶋健太郎）を受けた。